

若者ことばの発生と定着について

桑 本 裕 二

Production and Stability of *Wakamono Kotoba*

Yuji KUWAMOTO

(2002年11月29日受理)

This paper deals with *Wakamono Kotoba*; a kind of jargon which is mainly used among younger generation. As a first approximation, I define *Wakamono Kotoba* on the sociolinguistic viewpoints. *Wakamono Kotoba* mostly originates from another kind of jargons, especially from the one spoken among TV talents or staffs. Then the jargon forms it and is conveyed through various media; such as TV, comic books, or magazines. As a result, these media contribute to the formation of *Wakamono Kotoba* itself and to the wide spread of the strict meaning.

Wakamono Kotoba which seems to be stable has some interesting characteristics. One is the tendency to have wide usage and various kinds of derivations. It is similar to the normal word production. Another is the tendency not to use the word which seems too naughty and word-playing-like words in *Wakamono Kotoba*, though such qualities are the most symbolical properties of *Wakamono Kotoba*.

1. はじめに

「若者ことば」とよばれる語彙がある。これは「若者語」などと言われることもあり、また、大学のキャンパス内およびその周辺に語彙を限った「キャンパス用語」、女子高生が使うとされる「コギャル語」など様々に表現されるが、若者をその中心とする集団のなかで使われる、標準的でない言い回し、語彙の総称である。本稿は、この「若者ことば」がどこを発生源にしているのかということから、その伝わる経路について、また、結果としてどのような種類の語彙が若者ことばとして定着するのか、その特徴を挙げて考察したものである。

若者ことばは、上で挙げたように様々に表現されるということからしても、その定義が非常に不鮮明で、明確な境界を定めるのが困難だという現状がある。本稿ではまず、試案として大まかな定義を与える(第2節)。その定義に沿って、若者ことばの発生源について確認し、さらにその伝達経路とその特徴について考察する(第3節)。最後に、一時の流行ではなく若者ことばとしてしっかり定着するための条件について考え、6つの特徴を列挙する(第4節)。結論として、語彙の定着は通常の語彙とほぼ同じと考えられる正統的な過程をたどり、また、若

者ことばの主要な特徴と考えられる、「言葉遊び的側面」は、かえって定着の妨げになっていることを指摘する。

2. 若者ことばの定義

2.1. 世相語・流行語と若者ことば

ある時代、ある1年に起こった出来事、事件、風俗その他の流行などの様々な世相を反映した言葉として「世相語」というものがある。さらにそういった世相語の中でも「流行語」と呼ばれるものは「誇張のなかに娯楽性を含んだ表現で、そのときどきの世相・風俗を批判したことばや、その発音が奇抜であったりして人々の耳目を引きつけたことばで、一時的にひろく使われたり印象づけられたりしたことば」と定義される(稲垣 1999: p.9)。

若者文化を反映した「若者ことば」は当然、これら「世相語」「流行語」にも多く含まれる。稲垣(1999)の収録語彙のなかにも「アムラー」「ルーズソックス」「ゲットする」「みつぐ君」「マイブーム」といった若者ことば、あるいはそれを彷彿させる風俗語が並ぶ。

小矢野(2002)は、流行語について、当の流行が終われば終わりとなる、と述べている⁽¹⁾。つまり流

行語、ひいては世相語は、ある時代を如実に表す語彙群ではあるが、その大部分は流行の終了とともに消えゆく運命にある。若者ことばはある時代に生まれ、風俗習慣の流行とともに浸透し、あるものは流行とともに消えていく。しかしながら若者文化のなかでこなれながら徐々に定着していくものも多く存在する。現在を軸に、共時的に見ると、現存して使用されていなければ若者ことばとしては意味をなさない。消えていった語彙群は「死語」として分類されてしまうからである（加藤 1997, 20世紀死語辞典編集委員会 2000）。

このように、「若者ことば」は「世相語」「流行語」とは、共有される語彙は多いにしても、概念的には一線を画するものであると筆者は考える。次節で、若者ことばの定義に関する試案を述べる。

2.2. 若者ことばの定義に関する試案

若者ことばとは、現在のところ一意に決まっているものではなく、明確な定義もなされていない。用語自体、「若者ことば（言葉）」をはじめ、「若者語」「若者用語」、大学生および大学周辺に焦点をあてた「キャンパス用語」「女子大生用語」、一部の女子高生に焦点をあてた「コギャル語」「コギャル用語」など、これらを研究対象とする研究者またはこれに言及する諸分野の書き手により、また言及する時と場合により様々であり、統一された名称は与えられていないようである。筆者は開講授業においては「若者ことば」という用語を統一的に用いてきた。しかし、その開講授業中も常に明瞭かつ網羅的定義を模索しつつもその困難さに苛まれて現在に至っている。その主な理由として、

1. 「若者」とはどの世代、どのような集団を指すのか？年齢の上限はどのくらいか？社会的身分、立場に左右されるか？また、年齢に関して下の境界はあるのか？たとえば小学生、幼稚園児と年齢が下がっても使用されるか？
2. 若者ことばを発生させる地盤であると考えられる「若者文化」というものが本当に存在するのか？あるとすればそれはどのようなものなのか？
3. 語彙によっては、かなり年輩の年齢層にも浸透しているものもある。それをもって「若者ことば」と言えるのか？

の3点を指摘できる⁽²⁾。

1. については、その示す集団が非常に不明確である、ということである。一般に、「若者ことば」

を使う社会層は、学生（高校生～大学生）もしくは当該年齢の社会人ということになるだろう。しかし、中学生が高校に進学したら直ちに若者ことばを会話に交えるようになるとか、学校を卒業して就職し、社会に出て働くようになれば直ちに若者ことばを捨て去る、ということは容易に想像しがたい。実際、若者ことばと定義されるような語彙使用や言葉遣いをする年齢は個人差が甚だしく、容易に決定できない。

2. について。授業（論文末参照）において実感したこととして、二十歳前後の学生が、「自分はそのような言い方をしない、使ったことがない」という意見を言う場面が続出したこととも関係がある。若者ことばと見なされうる語彙を、当の「若者」のほぼ全体が使用するということはありえず、使用頻度、使用語彙の種類には個人の所属集団、趣味、素行により多様であり、そのなかからより普遍的な語彙を見つけ出すのは非常に困難である。また、そこに明確な基準を与えるのはさらに困難である。

3. については、第4節で後述することとも関連するが、「マジ」「ぶっちゃけた（話）」「～状態」など、かなり年輩の年齢層でも（くだけた口語使用の場面に限られるが）用いられる語彙があり、若者でない年齢層による使用のみられる語彙について「若者ことば」という名称を与えていいものか、という疑問が生じる。

このように、若者ことばの、特にその使用層および語彙の境界を見込んだ、しかも明確な定義をするのは極めて困難であると予想される。上の問題点を認識した上で、ここであえて緩やかな定義を試案として提案する。

若者ことばの定義（試案）

1. 使用年齢層は10代後半から20代前半までを中心とする。当然個人差もある。
2. 語彙はなるべく特定の趣味集団のものに偏らない。
3. 年輩の年齢層に使用が浸透しているもの、あるいは意味が知られているものについては、その分類を妨げない（上記「マジ」など）。

このように考えた根拠は以下の通りである。

1. について。若者ことばの指し示す事物、行動などを実行し始めるのは、おおむね高校生になってからであり、その当該年齢は15歳。また、高校から大学にかけて頻度が増すと思われ、就職とともに使用頻度は減る。その後もくだけた会話のなかでは使

用は続く。しかし、年齢層の様々な人とのつきあいがあり、時にフォーマルな場面での言語使用もあり、そのような生活のなかで徐々に使用が減っていくものと思われる。筆者自らの経験からしても30歳を越えると会話の全般にわたっていわゆる若者ことばが頻出することはなくなる。

2. について。コンピュータマニアの用語、麻雀愛好家の言葉、風俗産業の隠語など、使用層が社会的に制限されている語彙は、若者ことばに加えるべきではない（ただしかなり一般的に用いられている語彙も散見される（麻雀用語から「連チャン」など））。最大公約数的に若者の生活圏内に浸透しているもの、たとえばコンビニエンスストア、各種ファーストフード店、携帯電話やファッション、その他の服装、髪型など、かなり広範囲かつ長期にわたって流行っているキャラクターグッズなど、そのようなものにまつわる事物、行動、性質などの総体として、若者ことばというものを捉えたい。

3. について。消え去る流行語としては若者ことばとして意味をなさないということを2.1. 節で述べたが、現行の語彙として定着していることを、若者ことばの主要な特徴であると考ええる。よって、年輩の層にまで浸透が進んでいるもの、あるいはそれに準じて意味が理解されているものは、若者ことばのなかでも特により定着しているものと見なされる。この類のことばに「若者」ことばという名称を与えることの滑稽さは、この際無視したい。

3. 若者ことばの発生源とその経路

3.1. 若者ことばの発生源

若者ことばの発生源と考えられるものの一つとして、米川（2000b）の言う「集団語」を挙げることができる。集団語とは、特定の社会集団・専門分野に特有な、あるいは特徴的なことばのことで、反社会的集団の語（犯罪者隠語や不良用語など）・職業的集団・分野の語（業界用語・職場語）・趣味的娯楽集団・分野の語（囲碁・釣り用語など）・若者集団の語（若者語・キャンパス用語）と定義される（米川 2000b, p.1）。若者ことば自体、この「集団語」の一部と定義されているが、若者ことばを中心にして観察すると、元々は特定の集団内で隠語として用いられたものが、若者文化の中で何かの理由で流行し、用いられるようになったのが、そもそもの発生であると考えられる。筆者が分析した語彙を中心にとすると、たとえば次のようなものを挙げることができる。

不良用語から ヤバい、ばっくれる、パクる…
麻雀用語から 連チャン、テンパってる…
テレビの業界用語から かむ、ベタな、お約束…⁽³⁾

これらは網羅的ではなく、ほんの一例にすぎないが、一つには、不良用語、麻雀用語などを用いた集団は、暴走族、暴力団組員、犯罪者といった集団、あるいは、麻雀、さいころをはじめとする賭博の対象となるものの娯楽集団であって、どちらかと言えば反社会的集団といえるものである。そもそも、若者文化（と呼べるようなもの）は、もっとより高年齢層（の集団）から見れば、社会的立場、対人的ふるまいからして、一面的には反社会的集団と考えられる節もある。だから、同じく反社会的である集団の語彙を受け入れて自分たちの集団のものとする作用が働くのは納得のいく流れである。

一方、テレビ業界または音楽業界などに起源を持つと考えられるもの場合は、その要因は他のところにあると考えられる。上の例で、「かむ」などは、せりふを言いよんどんとちる、という意味の言葉である。これはもともと、テレビの作り手、または登場する芸能人の中での隠語であったもので、本来は一般視聴者の前で話されることはなかった。1990年代以降、特に甚だしく感じられることだが、芸能人・テレビタレントがテレビの中で業界用語を使いはじめ、バラエティー番組、お笑い番組のおもしろさの中核を担うようになる（タレントのマネージャーや制作スタッフを番組に登場させるなどの楽屋落ち的な番組作りもこのころに始まったものと思われる）。そして、おそらくはバラエティー番組、お笑い番組の視聴者の中心となる若者世代に徐々にそれらの言葉の意味、用法が認知されることになり、語感のおもしろさや便利さがうけて浸透していったものと考えられる。ちなみに上の例「かむ」は『現代用語の基礎知識』（自由国民社）には1997年版に記載があり、1995年頃から一般に使用され始めたとの意見もあり⁽⁴⁾、やはり、1990年代以降の一つの特徴と考えられる。

そのほか、「マジ」「へこむ」「キモい」「ジベタリアン」「コギャル」「ぶっちゃける」といった、発生源を明確にたどることのできない多くの語彙が存在する⁽⁵⁾。これらの語彙は集団語起源、テレビの業界用語起源などのように、もともと他で使われていたものの模倣ではなく、独自に自然発生したと考えられるものである。自然発生的であるというのは、若者ことばの主要な特徴のひとつであり、またここに分類される語彙は、若者ことばの持つ意味の多様性

や、造語における創造性を最も如実に具現している。

3.2. 若者ことばへと導く媒体と経路

前節では、若者ことばの発生源について述べたが、発生源が集団語、あるいはテレビ業界用語である場合であっても、当然のことながらあらゆるものが若者ことばとなっているわけではない。たとえば、音楽業界の隠語である、ギターなどのキー（C, D, E など）に数字を当てて金額を表す言い方（ツェー（C）マン＝1万円、ゲー（G）セン＝5千円など）や、相撲界の隠語である「金星（＝美人）」などは一般には浸透していない。他の集団語が若者ことばとなるためにはあるきっかけを必要とする。また、ある語彙が古くから若者ことばとして使われていたとしても、あるきっかけを機に使用頻度が増したり、使用する年齢層が拡大したりといったこともあり、その結果、若者ことばとしてより安定していくということもある。この「あるきっかけ」となっているものとは、語彙を媒介する媒体であり、つまりは、テレビ、漫画、雑誌などのメディアである。いくつかの例を挙げる。

<事例1「まったり」⁽⁶⁾>

今では、『広辞苑』（第5版、岩波書店、1998）に「味わいがまろやかでこくのあるさま」として掲載されている。一部地域の方言に原型が存在するが、全国的に広まったのは『週刊ビッグコミックスピリッツ』（小学館）に連載されたコミック『美味しんぼ』（1～82+巻、雁屋哲・花吹アキラ、小学館、1984-2002+）で、料理の味の表現に使われてからとされる。その後、意味が転じて「マクドナルドで（友人と）まったりする」などのように「のんびんだらりと時を過ごす」という意味での使用が見られるようになったが、これを助長したと思われるのは、テレビアニメ『おじゃる丸』（NHK、1998年～現在放映中）の放送であり、主人公おじゃる丸ののんびりした日常を「まったり」と表現したのが作品全体のモチーフとなっている。

<事例2「ソッコー」>

「レポート、ソッコーで終わらせて遊びに行こうぜ！」などと使われ、『現代用語の基礎知識』（自由国民社、1992年版）では、「即刻」が略されて「ソッコ」、語末が長くなって「ソッコー」が形成されたとされる。一方、『知恵蔵』（朝日新聞社、1997年版）では、「速攻」からであるとの記述がある。語彙分析を行った学生の間では、この「速攻」からという

印象がもっとも強い。使用時期は、上記掲載の年鑑等より、1990年前後頃からと考えられる。なお、コミック『Slam Dunk』（全31巻、井上雄彦、集英社、1991～1996、『週刊少年ジャンプ』（集英社）に連載）で、バスケットボールの攻撃の場面で頻繁に使われた表現であって、このことが「ソッコー」ということばを流行らせた一因であるとも考えられる。

<事例3「いけてる」>

人間に対して使えば、「かっこいい」の意味となる。特に異性に対して用いれば、かわいい、かっこいい、いかす、などと同義となり、性格よりは、むしろ容姿が重要視される。かつては「イカす」と言われものと同義と思われる。授業（論文末参照）では、ナインティナインのバラエティーテレビ番組『めっちゃ²（めっちゃめっちゃ）イケてるッ!』（フジテレビ系、現在放映中）から使われ始めたと考える学生が多かったが、それ以前からすでに使われていたはずである。少なくともこの番組の放送が始まった1990年代後半以降、特に流行ったと考えられる。

<事例4「ありえねえ」>

『現代用語の基礎知識』（自由国民社、2003年版）では、「信じられない、不可能だ、無理だ」の意味で掲載されている。ちなみに同年鑑2002年版には掲載されていない。連続ドラマ『東京庭付き一戸建て』（日本テレビ系、2002年7月～9月放映）のなかで、ある登場人物の若者が頻繁に発していた言葉で、ドラマの中ではその人物の単なる個人的な口癖であるように描かれていた。その後筆者の周囲でも耳にする機会が増えたように思うが、このドラマが火付け役ではないだろうか？

<事例5「イケメン」>

「イケ」は上記「いけてる」から。「メン」は『現代用語の基礎知識』（自由国民社、2003年版）の記載では「面」の解釈と「men（manの複数）」の解釈と2通り載っている。かつては「面」の意味のみで、「かっこいい顔、いけてる顔」という意味で、女性にも使われたが、最近はむしろ「かっこいい男性」の意味でもっぱら使われるようだ。この用法は男性ファッション雑誌での記事のタイトルなどから一般的になったと考えられる。現在は女性の形容にはほとんど使われていない。

<事例6「キレル」「ムカつく」>

「キレル」は急激に怒ること、「ムカつく」は腹

が立つこととはほぼ同義である。「キレル」に関しては、「MK5（エムケーファイブ、マジでキレル5秒前）」や、「逆ギレ（逆上されておとなしくしていた方が急に逆に逆上すること）」といった形もあり、また「ムカつく」に関しては、「チョームカつく」やその省略形の「チョムカ」といった言い回しも存在するというように、様々に派生するほどにすでに若者ことばとして定着している。これらの語は、1998年には、中学生の教師殺傷事件のテレビ・新聞などの報道を通して世間をにぎわし、一種の社会現象となった。これを機に、かなり高年齢層までこの語彙が認知されるようになった。

以上のように、若者ことばとなるための媒体は、漫画、テレビ番組、ファッション雑誌と様々な場合がある。上の事例の内、「まったく」「ありえねえ」のように明らかにその媒体から若者ことばとなったと考えられるものがある一方、「ソッコー」「いける」などのようにもとから若者ことばとして存在していたものが、媒体に乗ることにより広範囲に広まったと考えられるものもある。さらに、「まったく」「イケメン」のように媒体によって意味が変化したり、「キレル」「ムカつく」のように媒体にのることが若者以外の年齢層に広く認知されるきっかけになったりもする。このように、若者ことばを媒介する媒体のあり方は実に多様である。共通していることは全国一律のメディアを通して全国的に流行し、浸透しているということである。それは、同時的かつ網羅的であるといえる。

4. 若者ことばとしての定着の特徴

若者ことばの特徴として米川（1999, 2000a）は「会話のノリを第一にしたことばの娯楽」ということを強調している。確かに、若者ことばは会話のノリを楽しむ遊び心から親しまれ、繰り返して用いられているはずであるので、そのことは主要な特徴の一つと考えていい。しかし、第2節で述べたように、なんと言っても現在通用している語彙でなければ「死語」とみなされ、若者ことばとして意味をなさなくなるので、遊び心的側面よりは、むしろどのように若者ことばとして定着しているのかという面を強調し、そこから若者ことばの持つ特徴を探してみたい。米川（1999, 2000a）の指摘も考慮に入れながら、どのような特徴のある語彙が若者ことばとして（今のところ）定着しているのか、例を挙げながらその特徴について検討する。

特徴1. 使用場面が広いこと

若者ことばに圧倒的に多く存在するのが、「イタイ」「イっちゃってる」「うざい」「キモい」「へこむ」「しょばい」「キレル」「ムカつく」などの、相手をけなす、または自らの心的不快感を表現した言葉である。また逆に、「イケメン」「おいしい」「いやし系」「イケてる」など心的快感を表現したり、またその対象であったりする言葉も相当数存在する。これらの語彙は会話のなかに頻繁に現れ、使用場面も限定されることもない。また、対象も人でも物でもいいというようになりかなり広範囲に用いられる。また、「マジ？」や「ぶっちゃけた話」、また「ありえねえ」「ビビった！」などは、ほとんど相づちのように用いられるので使用頻度はかなり高く、定着の度合いも進んでいるようである。「マジ？」「マジで？」などの言い方は40代くらいまで使用がみられるが、第2節で示した若者ことば使用者の年齢層をはるかに越えている。こういった語はすでに若者ことばの枠を越えて、普通の俗語へと進みつつあり、定着の仕方からして若者ことばのうちでも「高級な」語彙といえる。

特徴2. 形態的派生形が存在すること

若者ことばとして定着したことの一つの証しとして、形態的派生形を持っていることを挙げることができる。元になっている言葉自体の意味が明確でないと派生などは起こらないからである。たとえば、「ムカつく」から「マジムカつく」「チョ（超）ムカ」「キレル」から「逆ギレ」。「タメ口」から「タメ語」。「天然ボケ」から「天然」さらに「天然はいってる」など。また、「むずかしい」から「むずい」、「きもちわるい」から「きもい」などの省略も、一種の形態派生と考えられる。

特徴3. 意味の転換

もともと存在した語彙が、まったく反対の意味で用いられたり、形容する対象でなかったものを形容するのに用いられて、若者ことばとなっているものがある。たとえば「ヤバい」はもともとは「危ない」の意味で使われたものが、最近では、「あの服、ヤバい」などと使い、いいもの過ぎてどんなことをしても手に入れたいくらいだ、と、「大変よい」の意味に転換している。特徴2同様、派生しているわけ（こちらは意味論的派生）、やはり、これも定着を示す特徴とみなされる。他に、「かわいい」（老人とか爬虫類などに対して）、「いたい」（ギャグがつまらなく、つらい）、「ありえねえ」（信じられない

いという意味で) などがある。

特徴4. あいまいな表現

あいまいな表現で全体の意味や主張をぼかすという手法は、若者ことばに特有のものである。たとえば、相手がそのことを知っていようがいきまいが「わたしって一人っ子じゃないですか、それで…」などと話をきりだしたり、話の冒頭に来る「っていうか」、あるいは「お父さんとかに聞いてみた」など複数の列挙でないのに使われる「とか」など、字義通りの意味をほとんど有していない語句は、その代表的な例である。このような言い方で会話の内容はずいぶん曖昧なものに感じられる。また「面白いかもー!」や「あいつ先生にしかられたっばいぞ」にみられる「〜かも」や「〜っばい」の言い方も断言をさける手法であると考えられる。このような断言、断定を避ける一種の婉曲用法は、伝統的な日本語の語用論的手法であり、若者ことばと言わずとも標準的な指標からして極めて日本語的な用法である。そして、物事の表現のしやすさ、楽さから特に若者ことばとして好まれているのだと思われる。

これとは逆に、若者ことばとして定着しない傾向を示す特徴を2点挙げる。

特徴5. 符丁的すぎるものは定着しない

米川(1999, 2000a)は、若者ことばの言葉遊び的側面を強調したが、これはむしろ若者ことばの定着を妨げる要因になっていると思われる。言葉遊びとしての性格のみを追求すれば、意味を伝える機能は関係なくなる。若者ことばはやはり会話の中心となるべきものであるから、暗号的なもの、省略しすぎのものなど、符丁的側面があまりにも強すぎるものは、意味がはっきりしなくなっかえって避けられるのであろう。たとえば「チョベリバ」という言い方が流行った時期があった(1996年頃)。これは「チャー・ベリー・バッド」の略であるが、あまりに省略しすぎたためか、すぐに使われなくなった。また、「MK5」(マジでキレる5秒前)など頭文字語となったものも意味が伝わりにくく、定着はそれほどしていない。

特徴6. テレビを通じて流行った芸能人の言動を発生源とするものは定着しない

第3節で、若者ことばを媒介するものとしてテレビを有力なものとして挙げた。業界用語や、ほかの集団語起源の語彙は多くテレビを通じて若者ことば

に取り入れられたが、芸能人の口癖やギャグの文句などは、若者ことばとして定着しないようである。自由国民社『現代用語の基礎知識』選、日本新語・流行語大賞⁽⁷⁾から、過去の受賞語のなかから芸能人の言動が元になっているものを挙げてみると、「聞いてないよォ」(ダチョウ倶楽部, 1993年), 「同情するならカネをくれ」(安達祐実, 1994年), 「だっちゅーの」(パイレーツ, 1998年)「おっはー」(慎吾ママ(香取慎吾), 2000年)など、今もって使用されるものは皆無に近い。これらの語彙はこれを発した芸能人の一時の流行、または、そのギャグや台詞の一時的な流行りを伝えているだけであって、世相を反映した流行語の域を出ない。

以上、若者ことばの定着するための主な特徴を6つ挙げ、説明を加えた。米川(1999, 2000a)の指摘するとおり、若者ことばの語彙には、言葉遊び的側面を併せ持つものが多い。しかし、定着への条件を中心に特徴を挙げると、使用頻度の高さ、派生形の存在など、通常の語彙の定着とほぼ同じと考えられる諸特徴を示していることに気づく。特徴4の「あいまいな表現」というのも、通常の日本語の語用論からしても正統的な手法である。また、逆に、言葉遊び的特徴を示しすぎるものはかえって避けられるらしいことや、テレビという強力な媒体を通して、定着しづらい語彙群があるらしいことも示された。全体的に見ると、使用場面の広さ、語義の豊かさ、明瞭さが、若者ことばとしての定着を促しているということがわかる。さらに言葉遊び的側面を強調しすぎず、「あまりふざけすぎない」ということも大きく作用しているらしいのである。

5. おわりに

以上、若者ことばの発生源、そこから若者ことばへ至る媒体と経路、および定着に至るまでを概観した。まずはじめに、これらに先だって若者ことばの定義を試みた。次の通りである。

1. 使用年齢層は10代後半から20代前半までを中心とする。当然個人差もある。
2. 語彙はなるべく特定の趣味集団のものに偏らない。
3. 年輩の年齢層に使用が浸透しているもの、あるいは意味が知られているものについては、その分類を妨げない。

これはあくまでも現在のところ試案であって、今後再考することによりどんどん修正される必要がある。また、第2節でも指摘したように、明確な基準を与えることができないままであって、これを今後どう克服するかについては、これからの研究の成果に期待する。

若者ことばの発生源としてはっきりわかっているものは、若者ことばと同じ集団語のものである。特に、犯罪者用語、不良用語、麻雀用語などのどちらかというアウトローの世界のことばが好まれている。また、テレビの業界用語からものも多い。これらのうち、前者は反社会的という反抗の表れと解釈できる。後者については、米川（2000a）はテレビ業界は若者の憧れの的であって、その業界用語を使うことで時代の先端にいることを意識するのだと主張している（米川 2000a: p.55）。いずれの場合も、若者に好まれる要因を有している。さらに、若者ことばへと至るまでに通過する媒体は、テレビ、雑誌をはじめとするメディアであって、全国的に同時的かつ網羅的に浸透することを主要な特徴として挙げることができる。

さらに若者ことばとしての定着の特徴として次の6つを挙げた。

- 特徴1. 使用場面が広いこと
- 特徴2. 形態的派生形が存在すること
- 特徴3. 意味の転換
- 特徴4. あいまいな表現
- 特徴5. 符丁的すぎるものは定着しない
- 特徴6. テレビを通じて流行った芸能人の言動を発生源とするものは定着しない

特徴1～3からは使用頻度が高いことを、特徴4からは標準的な日本語の語用論にも合致した傾向が見られることを見てとることができる。特徴5、6は米川（1999, 2000a）の指摘に反して言葉遊び的側面が強すぎると定着しづらいという傾向を示している。

若者ことばが取り沙汰されるときは、概して否定的な見方をされることが多い。しかし、本論で考察したように、その成立の過程を考えると、実は、標準的な語彙の成立の場合と類似の傾向をたどっていることがわかる。また、あまりに娯乐的、言葉のノリだけを追求したようなものはかえって定着しづらいということから、「不真面目な」語彙は若者ことばとしては長続きしないという、逆説的な結論を導くに至った。

本論文は、1999年から2000年にかけて筆者が担当して行った東北大学全学教育科目の英語の授業「日本語の若者ことばはどう英訳できるか？」における若者ことばの語彙分析とその考察に基づき、その後再考、修正を加えたものである。当授業において特に有益なコメントをし、授業に積極的に参加していた以下の学生諸君に感謝申し上げる。（所属・学年は受講当時）1999年度工学部2年: 蓮沼徹也、小林健太郎、2000年度薬学部1年: 井上絵里、岡崎香織、小松崎結希（webサイト: <http://www.ipc.akita-nct.ac.jp/~kuwamoto/wakamono.html>）。

また、本論文をまとめるきっかけを与えてくださった大阪外国語大学小矢野哲夫教授に謹んで御礼申し上げます次第である。

注

- (1) 「流行語には、「流行」の語が表しているように、終わりがあがる。流行が終わると、世相も変わっていると考えることができる」（小矢野 2002: p.44）
- (2) 筆者が開設するウェブサイト（日本語の若者ことばの英訳語彙集 <http://www.ipc.akita-nct.ac.jp/~kuwamoto/wakamono.html>）の「若者ことば」の定義における指摘に基づく。
- (3) テレビの業界用語からは、「せこい」「（時間が）おす」など、もはや普通に使用される語彙も多く見られる。
- (4) 論文末に述べる英語の授業における担当学生の実分析に基づいている。
- (5) 米川（1997）は若者ことばの発生について、心理的要因・歴史的要因・社会的要因の3つを挙げ、その発生した社会的背景について分析している（米川 1997: p.252ff.）。
- (6) 飯田（2001）はウェブページの検索による「まったり」についての詳しい意味分析を行っている。
- (7) <http://www.jiyu.co.jp/gendai/shingo/shingo.html>

参考文献

- 飯田朝子「『まったり』にみる味覚語の比喩拡張」『日本言語学会第122回大会予稿集』, pp. 65-70, (2001)
- 稲垣吉彦『平成・新語×流行語小辞典』講談社現代新書（1999）

加藤主税『世紀末死語辞典』中央公論社（1997）
小矢野哲夫「流行語に見る今の世相」『日本語学』,
第21巻, 第13号, pp. 44-54, (2002)
20世紀死語辞典編集委員会『20世紀死語辞典』太陽
出版（2000）
米川昭彦『若者ことば辞典』東京堂出版（1997）

米川昭彦「おもしろい現代語彙」『日本語学』, 第
18巻, 第1号, pp. 41-50, (1999)
米川昭彦「集団語に見ることば遊び」『日本語学』,
第19巻, 第1号, pp. 54-64, (2000a)
米川昭彦『集団語辞典』東京堂出版（2000b）